

博士 (2014 年度)

「先住民性」の多文脈化をめぐるミルパアルタ村落の民族誌 ——「伝統」と社会的帰属のローカリズム——

岸下 卓史

1. 研究の背景

2014 年時点でメキシコの人口はおよそ 1 億 2,000 万人で、その 1 割程度がスペイン語以外の言語を使用する先住民(indígena)である。メキシコ先住民は、今日、CDI 等の政府機関により言語指標をつうじて定義されているが、20 世紀初頭、メキシコ人のおよそ半数が何らかの先住民言語の話者であった。つまり、今日 9 割を占める先住民以外のメキシコ人(メスティーソ、mestizo)の多くが、3・4 世代前に何らかの先住民言語を使用していた先祖を持つ。だが、過去にメキシコを特徴づけていた先住民的側面は、適切な社会的評価を与えられていない。それは、メキシコでアメリカ合衆国＝ヨーロッパ的な文化が強く影響を及ぼしており、先住民的過去がメキシコ人の「伝統」として素朴に受容されていないからである。

ボンフィル・バタージャは「深層のメキシコ」(México Profundo)の概念をつうじて、先住民文化を中心に据えた社会モデルを提示し、アメリカ合衆国＝ヨーロッパ的文化に卓越性を付与する社会モデルを批判した。バタージャに留まらず、先住民文化の擁護は、植民地期、独立戦争、メキシコ革命を経て現在に至るまで、聖職者、革命指導者、政治家、作家、画家、民族運動家など様々な人々によって担われてきた。彼らは、ヨーロッパ＝近代文化とは異なる、先住民諸言語、農業中心の経済、祝祭慣習、社会的役割システムから成る先住民文化を賛美し、擁護した。なぜなら、先住民的文化要素が国民国家に不可欠な正統性を、スペインによる植民地支配を脱したメキシコに与えていたからだ。ただ、先住民文化に正統性が付与される一方で、実際には先住民の多くが貧困状態にあり、社会的に周縁化されていた。その後、20 世紀末になって、農村部の経済的困窮を背景に、先住民の都市圏への移住が加速した。この移住は先住民のあいだで文化変容を引き起こし、彼らの社会的属性を国民に転換してきた。これは、先住民文化の「真正な」担い手が消滅すること、また、先住民が一層社会的に孤立していくこと、という 2 つの点で、社会の根底を揺るがす問題だった。農村部の経済的困窮が引き起こす故郷からの人々の脱出が、差別を被る先住民という民族的帰属からの当事者の離脱と相応関係にあるため、この事態は民族運動家や先住民を対象とする研究者によって憂慮されたのである。けれども、先住民の国民への社会的転換は不可逆的な趨勢であり、研究者や民族運動家による啓蒙は及びにくい。

2. 論文の概要

こうしたメキシコ先住民の置かれた閉塞状況を解きほぐしうる、ひとつの実態が 1990 年代に入って明らかにされた。メキシコ市の「原村落」(Pueblos Originarios)では、住民が先住民文化との繋がりのなかでローカルな「伝統」を育てている。この「伝統」は、単に研究者によって客体化されるだけでなく、住民自身が彼らの起源を尊厳として再定義するなかで生み出される。原村落住民の先住民文化との関わり方は、「真正さ」の担い手の消滅

と先住民の社会的孤立という問題への回答となるものである。本質化を生み出す「真正さ」と社会的孤立から自由な先住民的帰属がそこに見出される。この社会的な背景を確認した上で、メキシコ市ミルパアルタ行政区に暮らすミルパルテンセ(milpaltense)の先住民性と、メキシコ農村部出身の移住者の先住民性が本論文において比較される。ミルパアルタにおいて移住者自身が帰属し、同時に原村落住民によって付与されている先住民性は「負い目」を伴うが、その理由は移住者の物質的貧しさをつうじて、歴史の影響がミルパアルタという場で作用しているためである。以上のように、ミルパルテンセが物質的な富をつうじて彼らの負い目を「尊厳」に変えていく実態と、ミルパアルタにやって来た一部の移住者が物質的貧しさのため一層の負い目に晒されている実態が、住民生活の観察および記述と、インタビュー内容の解釈をつうじて明らかにされた。

3. 論文の構成

1章 混血性に内在する「先住民性」への着目

国民の理想型、メスティーソ(先住民とスペイン人の混血者)に対置される形で先住民が本質化されてきた事実を確認した。その上で、ボンフィル・バタージャの「深層のメキシコ」の議論に依拠し、先住民性が潜在的に本質化を免れうるものである点を指摘した。まず、メキシコが国民国家モデルをつうじて統合されていく過程で、理想の国民としての「メスティーソ」が要請され、その国民カテゴリーから除外された人々が「真正な先住民」という認識でもって括られてきた点を確認した。そして、バタージャの提示した遍在する先住民性、すなわち「深層のメキシコ」に依拠しながら、過去に、また今日、社会関係の中で「先住民性」が変化するものであると論証した。最後に、都市化と国民化が徹底している現代メキシコで、1970年代から1980年代にかけて研究者によって研究対象となった先住民性とは異なる先住民性が存在しているという仮説が提示され、この仮説で1章を締めくくると共に、博論の中核的な問いとした。

2章 原村落への注目とメキシコ市における普遍的「先住民性」

別様の先住民性の議論を発展させ、1990年代半ばからメキシコ市の原村落と呼ばれる場所で、先住民文化との繋がりで自己同定を行う住民たちが現れている点が論じられ、これを真正な先住民とは異なる先住民であると位置づけた。「原村落」は、都市空間において衰退したと考えられていた先住民的な文化を保持する集団・場所を指す。メキシコ市における原村落の出現は、サパティスタの反乱、政府の先住民部門による公式認定、土地保全運動、先住民文化の残存といった影響を背景に、住民たちのローカル文化への愛着によって生じた。ただ、原村落に関する研究が、その現代的意義を十分に焦点化していない点を指摘し、その今日的重要性が、都市的文脈のなかで住民が先住民性に回帰し、村落というタームで自称していることだと論じて、1章で提示した問いをさらに深めた。

3章 ローカルな帰属意識の源泉としてのミルパアルタ史

原村落のひとつであるメキシコ市ミルパアルタ行政区の歴史が創作されている点に着目し、創作の動機を近代化に対抗するための「伝統」の再構築と位置づけるとともに、この伝統の及ぼす今日のミルパアルタへの影響を選挙言説の分析をつうじて確認した。まず、ミルパアルタで住民が歴史との関わりのなかで原村落への帰属意識をどのように

醸成してきたのが議論された。その議論の過程で、住民が、F・ビジャヌエバという郷土史家の創作した根拠薄弱な歴史を受け容れてきたことが明らかになった。歴史は、ミルパアルタを舞台にした先スペイン期から現代までの多様な民族の興亡と王による国の導きをダイナミックに描写する。住民によって受容された創作史が、歴史学的には虚偽でも、内容の普及や慣習実践を通して、今日では社会的現実の一部を構成するに至る。創作者の遺志と住民の意志の間の符合が、創設史と選挙パンフレットの間の言説の符合と平行であることを確認し、この伝統への回帰のメッセージを、A・ギデンズの「真正な伝統」に依拠して位置づけた。

4章 ミルパアルタ行政区の地理と社会

貧困を脱したミルパアルタの住民、ミルパルテンセが希求する先住民性が、産業発展の結果としての富裕化、教育水準・生活環境の向上、教育水準の向上といった「近代」化を前提としている点、負い目を抱えた「真正な」先住民性とは異なる点が明らかになった。近代化によってメキシコの都市圏で見られるような生活環境と当該地域のそれとますます近似しているにもかかわらず、ミルパアルタが依然としてノパル(食用サボテン)生産に代表されるような産業構造および生態環境を維持している。この点を踏まえ、ローカルな文化や慣習が、主流社会への統合の過程で根絶されていくのではなく、住民自身の意志で、「伝統」という位置を付与され、特徴的に創出されている点が明らかにされている。

5章 各住民カテゴリーの生活実態と社会階層

ミルパルテンセと移住者のあいだの所得・住環境の格差と再生産を論じた。また、婚姻による階層移動と階層再生産が同時に生じていることを明らかにされる。まず、所得格差を明らかにするため、ビジャ・ミルパアルタで実施した聞き取り調査に依拠し、所得格差によって、豊かなミルパルテンセ、一般の移住者、先住民系移住者の所得格差が先住民性の濃淡と相応していることを明らかにしている。次に、住環境においても明確な所得格差が反映されていることが観察されている。階層内結婚が固定化する一方、階層間結婚が半数に上る予想を覆す実態が示される。だが、この事実が、同時に、ミルパルテンセと結婚しない移住者が依然低い階層に留まることを意味すると論じた。

6章 ミルパアルタにおいて上演される帰属意識

祝祭という文化実践に着目し、先住民性の表現される場として、ミルパアルタの地域祭と私的なフィエスタが取り上げられる。前者をミルパアルタのローカルな「伝統」実践を表現するもの、後者をミルパルテンセと移住者の社会階層を如実に表すものと位置づけた。ミルパアルタの地域祭において、行政区首長による「伝統を取り戻す」という演説が、F・ビジャヌエバによる創作史の言説に従っている実態が観察される。そして、本質的に在るのではなく住民自身の手によって創出される「伝統」のコンセプトが、社会的立場の異なるミルパルテンセによって共有されていることが確認された。地域祭でローカルな先住民性が演出される一方、各世帯で私的に催されるフィエスタはその規模と出し物をつうじて階層性の表出の場となっている。これら2種類の祝祭から、土地固有の先住民性と各住民の社会的属性に基づく先住民性が観察されている。

7章 歴史・「進歩」・自尊心をめぐる先住民的帰属

インタビューデータに依拠して、ミルパルテンセが貧しい生活を送る移住者を「イン

ディオ」イメージで同定し、彼ら自身と弁別することで、真正な先住民性を回避していることが浮き彫りにされる。まず、インタビューで、ミルパルテンセが自らを先住民と決して認めない実態が確認されるが、同一のインフォーマントが論者とのラポールの深まりと共に先住民と認める態度の変化が提示されている。また、貧しい先住民系移住者がミルパルテンセに劣等感を抱き、ミルパアルタで疎外感を感じているが、中流世帯の先住民系移住者の場合、この屈託した感情を抱いていない点を確認した。つまり、相対的に高い階層が、ミルパルテンセに対する負い目を打ち消し、彼ら自身の先住民性を自由に表出する実態も観察された。以上の点から、先住民性の表出と回避が、状況と関係性のなかで選択されていることが明らかになった。

【結論】

終章では、1章から7章の内容を振り返った上で、ミルパアルタという地域には、創出的な先住民性が「伝統」的慣習をつうじて育まれており、社会階層に応じて真性な先住民性がラベリングされる実態がある、と本論文の結論を提示した。さらに、経済発展を遂げながら先住民性を保持するミルパアルタを、都市部やアメリカ合衆国へのメキシコ先住民の移民現象と対比させ、前者を先住民性の負い目と尊厳の間で揺れつつも、先住民アイデンティティを理想のものに変えていく実践的ローカリズムと評価して論文全体を結んだ。